

どろんどろんと コミュニケーション



移住・定住元年

Vol.118

人口の減少が止まりません。その理由のひとつは生まれる人の数より、亡くなる人の数の方が多ということ。毎月、広報とばを見ていてそれを感ずる方も多いと思います。これが自然減と言われるものです。ふたつには鳥羽を離れて都会に出て行く人が多

いということ。こちらは社会減と言われます。これまで、なんとか人口減少を食い止めようとして、やれ働く場が大事だから工場誘致だ、やれ子育て支援だと頑張っては来ましたが、なかなか思ったようにはいきませんでした。そこで今回考えたのは都会から人を受け入れよう

ということ。今までの、地方から都市部への人口の流

れを、ちよつとだけ都市部から地方へ変えようというもの。仕事が無いと人が居てくれないという考えにとらわれず、とにかく人に住んでもらうて、それから仕事を探そうという順番です。そのためには、鳥羽に住むということに魅力が無ければなりません。1月4日に移住・定住ワンストップ窓口を企画財政課に設置し、市外からの問い合わせに迅速に対応しつつ、魅力作りを目指して活動を開始しました。移住してきた人たちのための仕事、住宅、保育所や学校などあらゆるものに関わる難しい業務であると思

かな田舎に住みたい」と考える人も割合多いようです。移住してきた人たちが住む家を新築するのが一番いいのですが、費用がかかりすぎるので、空き家や市営住宅を利用したいと考えています。その改修費用は市の方でまかない、月々の借家料は出来る限り安くしたいと思っています。肝心の仕事の方は市内の事業所さんの協力が無くなってきます。保育所の利用しやすさなどをはじめとして、さまざまな施策を市として打ち出し、移住を実現したいと思いが、受け入れる側の市民や事業所さんの協力も無いと定住の実現は難しいと思います。日本の人口が減少しているなかでの試みですので、所詮人口の取り合いではないかと言う人もいますが、現在どんどんと鳥羽から人口が吸い取られていくわけですので、少しは取り返すこともありかと思

います。他方で、国がもつと力を入れて自然減を食い止めてくれたら言うこと無しですね。



Vol.145

その話、ホント!?

次の話を読んで、考えてみましょう。

Aさん・Bさん・Cさん・Dさんの4人は同じクラスで、家も同じ方向です。今日も学校からの帰り道、こんなおしゃべりをしながら歩いていきます。

Aさん「今日の帰りの会、長くて大変だったなあ。Xさんの靴をかくしたのは、けっきよ、誰だったのだろう? まあ、靴は見つかったからよかったけど」

Bさん「実は私、なんとなく『あの子かな』と思っている人いたんだけど・・・」
Cさん「あ、それってもしかして、Yさんじゃない? 帰りの会の間、ずっと下向いてたしね」

Bさん「そうそう」
Aさん「え、そうなんだ!

じゃあ、さっさと名のり出てくれば、帰りの会、早く終われたのに! Yさんて、あまりしゃべらないし、なに考えてるか分からないだよねえ」
Dさん「(そういえば、この前めずらしく、YさんとXさんが言い合っていたな。それで、嫌がらせをしたのかな?)」(Cの言葉は、心の中で思ったこと。

このあとDさんはどれかの行動をとるとします。どれがよいと思われませんか。

A. 「Yさんが、Xさんに嫌がらせをしたのかもしれない」と言う

イ. 「Yさんがどうか分からないから、その話はやめよう」と言う

ウ. 「明日、Yさん本人に確かめてみよう」と言う

エ. この話には加わらない(いじめの問題を解決するための指導資料「ともにつくるあした」より)

胸に手を当てて考えてみましょう。何気ない会話の中で偏見や誤解を生じる場面を作っていないか。人を傷つけてはいませんか。さらに情報ネットワークの発達で、噂が真実のように全世界に広がっていく時代になってきています。